報恩の旅――大震災に見舞われて

高乃　正顕

一

出入りの激しい海岸線を嫌うように、レールが内陸側に逸れて伸びている。一両のローカル電車が南に向かって進行中である。平日の午後、車内は閑散としている。高齢者の男女七～八人が一団となって談笑している。少し離れた席に幼児を連れた母親が読書中である。幼児は電車の中央を走る細長い通路に興味があるらしく、行ったり来りしている。高齢者たちの側を通る度に、誰かがちょっかいをかけている。それが面白いと幼児は、おどけながら何度も繰り返す。スーツにネクタイの二人は、更に離れた席で向かい合っていた。

「二日間の研修会、出てみてどうだった」

牛尾田幸太がスポーツ紙を読んでいる石見に話しかけた。

「いまさらというところが多くて、耳新しいことはあまりなかったような気がしたなあ」

「うーん、オレも同感だったよ」

二人が参加した今回の研修は、中堅教員の教育実務研修という標題のものである。教員も経験が十年を過ぎると、仕事に対する緊張感が薄れてくる。惰性に陥りやすい毎日の教育活動の再点検と、新しい学習指導の徹底として、県教委が実施しているものである。

向こうの座席に居た高齢女性の一人が近づいて来た。揺れる電車の中で座席の背もたれ伝いに、ゆっくりした足取りで幸太の向かいの席に腰を下ろした。顔をしげしげと見て

「あんた、牛尾田さんとこの息子さんじゃなかったですか」

思いがけない客からの話しかけに、幸太はきょとんとしていた。思い直してから

「はい、そうですが――」

「ああ、よかった。名前は何とおっしゃいましたかね」

「はい、幸太（コウタ）です」
「ああ、ほんだぼんだ。コーちゃんで通していましたがね」
身振り、話振りから梶沼真由の母サキヨであることを、ようやく思い出した。
「コーちゃん、いま何の仕事をしてんの」
「沖見の小学校に勤めております」
「先生やっとんのかね。立派になりましたがね。娘と同級だから、もう三十過ぎやね」
梶沼サキヨは愛しむような眼差しで、幸太を見つめていた。そして話し続けた。
「お母さん亡くなって、何年になりましたかねえ」
「今年で十五年になります」
「もう、そんなになるかね。若くして亡くなってしもうたもんなあ。お元気だったら、さぞかし自慢したでしょうになあ。あんたのことを、なあ」
「母はいつも、梶沼さんのお母さんには、お世話になりっぱなしで、いつかお返しをと言いながら、果たすこともできず――、申し訳なく思っております」
「何言ってんの。お母さんと私は友達同士よ。お互い持ちつ持たれつは当たり前のこと」
幸太は先程まで、サキヨが話の輪に入っていた仲間のことが気になって
「ところでおばさん、旅行か何かの帰りなんですか」
聞かれたサキヨは仲間の方を振り向きながら
「何も、病院通いの帰りさ。私も体のあちこちが痛くなってね。リウマチだって。昨今はいくらか楽になって来たが、冬場は大変だったのよ。向こうに居る連中もみな、病院のお得意さんばかりなんよ」
笑いながらも、半分あきれ顔をしながら話していた。電車は春先の田園地帯を走っている。
電車の小刻みでリズミカルな振動が急に変わった。体が左右に大きく振られた。窓辺に押し付けられたり、通路へ傾いたりと不安定になった。電車のスピードが落ちて、停車した。金属製の巨大な空間が、右に左に揺れた。客は立ち上がり、車内は騒然となった。
「地震だ、地震だ。窓を開けろ。随分長く揺れているなあ」
「こりゃ、大きな地震だぞ。外へ出なきゃ」
車内のあちこちから大声が飛び交った。幼児の泣く声が聞こえる。車内の照明が

消えた。牛尾田幸太は目の前のサキヨを抱きかかえて、肘掛けをしっかり掴んだ。石見も背もたれにしがみついている。二人とも振り飛ばされないようにしているのが、精一杯である。揺れが小休止したかと思うと、今度は大きな音がどこからか聞こえたようだ。電車の床が一瞬、跳ね上がった。続いて、電車の前の方が急に下がった。床がスロープになってしまった。通路に出ていた客の何人かが滑りながら押し重なった。どうやら突き上げの衝撃で、前輪が脱線した模様である。窓ガラス越しに見える沿線の電柱が、右に左に傾いている。振動は治まったようである。運転手の五ッ井が慌ただしく、電車の後方へ走って行った。間もなく戻って来て、また後ろへ行った。ハンドスピーカーを持って、客席中央へ来た。

「ただいまは、大きな地震のようです。電車内は停電でドアは開きません。線路はぐにゃぐにゃで走行不能です。この後の余震も考えられますので、一旦外へ出ましょう。後ろの車掌室の非常口から、一人ずつ出ていただきます」

脱出ということで、客は自分の荷物を手元にまとめ始めた。運転手は続けて

「外に梯子を用意します。私が外で支えますので、足元に気を付けながらゆっくり降りてください。恐れ入りますがそこのお二人、ご協力をお願い致します」

運転手は牛尾田と石見の方を向いて、懇願するように頭を下げた。交通機関が運行上の非常時に出くわした時、運転手が当座の責任指揮をとるのは当然のことと思われる。乗客の安全が第一であり、若い二人は協力を惜しまなかった。まず母と幼児が外へ出た。続いて女性達となり、サキヨも無事脱出した。男性の中にはスロープの滑り落ちで肩や腕を痛めた人がいたはずだが、大丈夫と言って介助を遠慮していた。最後に牛尾田と石見が降りて、全員の脱出を終えた。降りた客達は次々と前の方へ進むので、二人も後を追った。何たる事か。前輪がレールから外れて、バラスの中にめり込んでいるではないか。大きな鋼鉄製の車体をひと押しで持ち上げるほどの、自然の力の驚異の一端を見る思いであった。車内での恐怖から解放された乗客達は、思い思いにレールや草の上に腰を下ろした。外気を胸一杯吸い込んで我に返っていた。

「ああ、やっと命が救われた思いだ」

「このまま電車と一緒に引っ繰り返るのかと思ったもんだ」

座り込んだ客からそれぞれに、安堵と恐怖の心情が口から漏れていた。

牛尾田事大は何気なく触れたポケットに携帯電話の感触を感じた。取り出して、

開いて見て驚いた。今の地震の速報が、画面一杯に点滅していた。『三陸沖で地震発生　マグニチュード八・八』このメッセージと交互に次の文言があった。『沿岸地域に津波警報　発令』。画面にはどこかの漁港に設置してある、お天気カメラのものと思われる映像が映っていた。岸壁の漁船の近くに人影は見られない。波打ち際の水位が規則的に上下を繰り返しているだけである。このメッセージを見て、幸太が大声を出した。

「津波だ。津波が来るとよお」

この声に周囲の人々が集まって来た。ワンセグの画面は漁港を背景にして二種類のロゴを繰り返すばかりである。これを見て高齢者の一人が叫んだ。

「どこへ逃げればいいんだ。この辺りは平地ばかりだ。より高く、より遠くとは言うが」

「地震の後は津波と決まっとる。特に震源が海の時はな。とにかく海から離れることだ」

人生を長く生き抜いて来た人達は、経験が豊かである。言葉の端々に貴重な戒めが次々と飛び出して来る。運転手の五ッ井が客を集めて話を始めた。両手を口元で開いて

「皆さん、津波が来るようです。急いで移動しましょう。ちょっと遠いですが、あの山へ行きましょう。外に方法はないと思いますので」

乗客の安全を意識してか、かなり強い口調であった。五ッ井の指差す方向には、そう高くはない丘陵地形が南北に連なっている。全面が雑木林で被われているように見える。この時、線路脇の木々の枝が一斉に揺れた。客達はほぼ同時に地面にしゃがみ込んだ。大地の揺れ戻しであった。

「私が先頭を歩きますのでお二人は恐れ入りますが、また後ろをお願い致します」

五ッ井の会釈に牛尾田と石見は、再び頭を下げて承知した。運転手の脱いだ帽子の跡に白いものが見えた。五十才前後と思われる。的確な判断と落ち着いた言動が、乗客からは信頼をもって迎えられている。指示により二人は最後尾を歩いた。行列全体が何となく急ぎ足である。背後から迫り来るであろう恐怖に対して、いっときでも早く逃れようとする共通の心理がはたらいているに相違ない。誰もが無口であった。十分ほど歩いたところで、海岸線と平行に走る国道を横切った。路面を見て皆が驚嘆の声をあげた。表面のアスファルトは、割れた煎餅を撒き散らしたよう

である。さらに遠目には路面の起伏や蛇行が激しい。途中に乗り放った車が散見された。人影は見られない。

逃避行列の中ほどで歩みの遅くなった女性が一人いた。間もなく列から離れ、最後尾に追いつかれた。見れば梶沼サキヨである。

「おばさん、どうしました。体の具合でも悪いんですか」

「いや、足が痛くなってね。みなさんと一緒には歩けません。どうぞ、お先に」

「とんでもない。おばさん一人を置いて行くわけにはいきません。それじゃ、ボクが負んぶしましょう」

幸太は持っていたカバンを石見に預け、サキヨの前で背を向けてしゃがんだ。石見はサキヨの手提げも引き受けた。幸太は手を後ろに回して勢いよく立ち上がった。サキヨの体は思いの外軽かった。反動をつけて体を押し上げると、柔らかな感触が事大の背中を被った。

「悪いね、コーちゃん。申し訳ありませんね」

「そんなことないですよ、おばさん。今は普通じゃないんですよ。津波が来るかも知れないんですよ。早く安全な所へ行きましょう」

間もなく幸大の足は、先を行く一行に追い付いた。

二

幸太が小学生の頃、自宅は借家であった。向かいにある大家の梶沼家の敷地内に、大きな楡の木がそびえていた。住宅館にそそり立つこの大木は辺りのランドマークであった。かなりの老木ではあったが、下界の家屋や住人を冬の季節風から守ってくれた。夏は日陰を提供し、秋は黄葉を装って目を楽しませてくれた。その黄葉が散り始めた頃、台風が接近して来た。予想をはるかに越える強風になっていた。朝から吹く南東からの生暖かい風が、昼近くになって暴風と化した。長年、住民を守ってくれた老木は北西風には強かったが、反対方向からの風には油断があったようだ。熱帯生まれの強風をまともに受けて、巨体は敢えなく打ちのめされた。運悪く、倒れた方向に幸太の家があった。玄関、茶の間など家の前面部分が太い枝の下敷きになった。昼間の出来事だったので、家人は不在であった。人命に被害の及ばなかったのが何よりと、不幸中の幸いを喜び合った。破損のなかった部分でもドアや柱に狂いが生じて、住む物にはならなかった。梶沼家の恐縮と詫びの意思表示は筆舌に

尽くし難いものがあった。取り敢えずの生活の基盤をと、生前祖母が使用していた部屋を片付けて、空き部屋を二つ提供してくれた。生憎、水回りがなかったので食事や風呂は共同であった。サキヨの面倒見のよさと幸大の母芳子の遠慮深さとがうまくかみ合って、不運な中にも和やかな生活が始まった。ふたかまどの食事の準備に、芳子の方は恐縮の毎日であった。しかし、サキヨは億劫がることもなく、得手な手仕事であり好意的であった。このことで、家屋損壊という大きな負債のいくらかの穴埋めにしようなどとは、梶沼家は微塵も考えてはいないようであった。立場上、サキヨに主導権があり、芳子は協力者の役割である。芳子にとっては、この方が気が楽であった。ある日、夕食の準備中サキヨが手が放せないといって

「芳子さん、漬物取るのお願いします。小屋の樽の「春ーセ」と書いたのから、セロリを二本、おねがいします」

と台所用のボウルを渡された。指示に従い、勝手口から渡り廊下を通って小屋の戸を開けた。普段見慣れている小屋の外観は、板張りの建物で母屋に付随している。物置に使っているのだろうぐらいに思っていた。中に入って目がくらむ思いであった。大小二十余りの樽が整然と並んでいる。さらに几帳面に、蓋にはそれぞれ記名がしてある。ここは小屋というより、漬物庫と呼ぶに相応しいと思うほどであった。日頃サキヨとの話のなかで、漬物に詳しいようだとは承知していた。しかし手製のものがこれほど用意されているとは、想像すらできなかった。玄人はだしである。食卓に出る漬物が日替わりであるわけがこれで分かったと思った。それ以降芳子は見るも、食べるも、作るまでも漬物の魅力に引き込まれてしまっていた。暇を見つけては、漬物手法のあれこれをサキヨに教示願うことになった。サキヨもまた、自分の得意分野でもあったので快く応じてくれた。樽の記名は何を意味するのかを尋ねたところ、食べ頃の時期と食材の頭文字だと聞いて二人で大笑いした。

「だって樽が並ぶと、どこに何があるのか分からなくなるんですもの。生活の知恵よ」

芳子は感心するばかりであった。達人のつくる名作は多彩である。季節毎の食材をそれぞれの特徴によって塩、酢、柏、味噌、あるいはこれらの組み合わせなどと手法は様々である。その成果は翌日に供される一夜漬けから、一年以上も開封厳禁というものもある。労作を享受する家族や知人には勿論、好評であったそうだ。

芳子は小さい頃から料理に関しては、特別な指導など受けたことはなかった。母

親からの伝来の方法の見様、見真似のまね事だけで今までやって来ていた。最近は時代の流れに乗って、出来合いやレトルトの割合が増えて来ていた。料理とか、食事の用意などは毎日のことながら面倒なもので、できるだけ簡単に済ませてしまおうという意識が、いつも心のどこかから離れないで居た。サキヨの漬物講習は、漬物への関心のみならず、料理一般への開眼にもなった。漬物名手から得られた知識の数々は、枚挙にいとまがない。芳子にとっては、単に漬物や料理が上手になったというよりも、それらの準備や取り組みに抵抗感がなくなってきたと言った方が適切のようである。すなわち、技量を伴った知識が増えた分、準備に余裕が生じたのだといえよう。毎日の生活での自信になった。これが家族の笑顔や喜びにつながれば、主婦としてこれほどの幸せなことはない。ここに至るまでのサキヨの教えは一生忘れることはできない、いつも心に留めておくべき銘記であると言っていた。台風からひと冬越した花の咲くころ、牛尾田家は郊外の新興住宅地に建て売りを構えることになった。サキヨの芳子への手ほどきは、その後もしばらく続いた。

牛尾田、梶沼両方の父は、二人とも若いころから沖見市にある遠洋漁業の会社に属する船員である。両家の絆は、ここから始まっていることになる。数カ月にも及ぶマグロ漁を年二度実施している。赤道を挟んでの延縄漁であり、以前はクロマグロが中心であった。近年は資源不足に加えて野生生物種の保護とかで、世界的に規制が厳しくなって来た。会社としても将来への見通しと計画の中で、いち早くメバチマグロに切り替えを敢行した。漁体は幾分小型化したが、その分船内での収容個体数が多くなった。一度の航海による採算はそれほどの差異はないという。船上では剛腕を自慢している父同士だが、自宅へ帰ればほとんど借猫同然なところはよく似ていると、双方の妻は笑って見ていた。

三

娘が小学校高学年になって手がかからなくなり、サキヨは仕事に出ることにした。家にばかり居ては、精神的にも身体的にも不健康である。外に出て世間の風に吹かれたいと思っていた。知人の紹介で、浜の水産加工場の手仕事を手伝うことになった。それから一年以上も経った頃、仕事の様子を伝え聞いた芳子が、サキヨとならばと一緒に通うことになった。工場は季節によりあるいは魚種により異なるが、盛漁期は天手古舞の忙しさになる。近海ものが多く、船が着くと魚は回り回って調理

台にやってきて、作業になる。女性達の慣れた手捌きで動きは速い。同じ仕草を繰り返す様は、ロボット仕掛けのようである。調理台はまた、情報交換の場にもなる。手の動き同様に口の動きも止まらない。作業は魚種により背開き、腹開き、時に三枚下ろしのこともある。保存するものは、素干しか軽い塩干しになる。この後の天日干しがまたひと仕事である。風のある時は綱を被せるが、雨になると大慌てになる。シートで被ったり、思い切って片付けることもある。そのために何人かは必ず当番として居残りがある。サキヨが当番になると、決まって芳子を補助員に指名する。気心の知れた者同士で、作業も捗ると言う。引っ込み思案の芳子にとってサキヨの存在は生活すべてにおいて、先導的役割をはたしていたと言えよう。

サキヨの一人娘の真由は幸太と同じ学年である。家が近かったころは行き来が多く、兄弟みたいなものであった。幸太の家が新しくなって、離れ離れになってしまった。二人の母が仕事をするようになって共に鍵っ子になった。学校から帰って母が留守のときは、決まってそのまま加工場へ行った。母達の控えの部屋に上がり込んで、机を並べて宿題をしたり、本を読んだりした。真由のお母さんのサキヨは強気なところはあるものの、話し方や立ち居振る舞いは柔らかで上品に見えた。いつも帰り際に言う「コーちゃん、またあしたね」の一言と笑顔がとても嬉しかった。ある時、親戚の法要だといって、二～三日留守になったことがあった。幸太はいつものように加工場へ行って、一人で母の帰りを待った。帰宅しても何となく張りがない。何をしても気が乗らない。口数も少なく無気力であった。

「幸太、今日はどうしたの。体の具合でも悪いのかい」

いつもと様子の違うのを母にとがめられて、はっとしたことがあった。

真由が同じクラスの友人から、金毘羅神社の秋祭りでお神楽を舞うので、見に来ないかと誘われたらしい。一人では不安なので、幸太もと言われ同行することにした。小学校六年の時であった。当日の放課後、いつものように母の仕事場にカバンを置いて、二人で出掛けた。知らない道路だったが、教えられたとおりに歩いたら、三十分ぐらいして幡が何本も立っているのが見えた。仮設の舞台では丁度、舞いが始まるところであった。舞台前の人だかりを縫い、真由の手を引いて真ん前に出た。ゆったりした笛の音に乗って、四人の舞子がすり足で登場した。友人は前の列に居るのですぐに分かった。紅白の派手な装束に豪華な髪飾りをつけている。友人が天使となって舞い降りて来て、何かを語りかけているように見えた。真由は心を奪わ

れたかのように見入っていた。
「きれいだね。あした、学校へ行ったら褒めてやろうよ」
幸太が語りかけたが、真由の耳には届かなかったようだ。舞いが終わると余韻を打ち砕くように、観客は四散した。我に返った真由は
「すごかったね。きれいだったね」
を繰り返し、事大と顔を見合わせて笑った。秋の陽はつるべ落としである。思いの外、空は暗く西の方から重そうな雲が張り出していた。
「真由、急いで帰ろう。お母さん達が心配するから」
幸太の一言にうなずいて、真由は事大の後を追った。歩き始めて間もなく、まだらに雨粒が二人の頭を打った。雨は急に強くなった。体の前面に雨粒が多く当たる。濡れた薄手の服が、真由の地肌にまとわりついてきた。顔に当たる雨粒は涙と混じって顎まで垂れ落ちている。真由が言った。
「コーちゃん、寒いよお。足が痛くなってきた」
歩みの遅くなった真由の手を引いて、事大はぐんぐん歩いた。この雨の中、傘もなくびしょ濡れで歩く二人の子供を、通りすがりの人々は振り返って見ていた。雨粒が目に入るので、幸太は目を細めて歩いた。無心になって足元だけを見ながら歩いた。目の前が急に明るくなったので顔を上げると、出掛けに見た大きなネオンが光ってそこにあった。
「真由、着いたぞ。母さんたちに謝るんだよ」
幸太の凛とした一言に真由の心は安らいだ。加工場の控室には明かりが見えた。二人は静かに戸を開けた。母と事務所の人の三人が、机を囲んで話をしていた。真由は母の顔を見たとたん、感極まって泣き出してしまった。幸太は芳子の鋭い眼差しに答えるように、今までの行動を順序よく話をした。残されたカバンから二人が神社へ行ったことは、以前からの話で知っていた。むしろ雨具を持っていなかったことが、心配だったようである。寒い寒いという二人の訴えに、暖房を入れてくれた事務所の人の車の中で、二人ともシートに沈んで間もおかずに眠りこけてしまった。
幸太が高校三年の時であった。朝の食事中、向かいの母芳子の顔を見て気が付いた。
「母さん、眠が変だよ。白眼が黄色っぽいよ」

言われて芳子は、壁に掛かっている鏡を覗き込んだ。
「別に体の調子に悪いところはないわよ。物もよく見えるし、そう少し黄色っぽいかね」
「違うよ母さん。眼が黄色いのは、肝臓に関係があるって聞いたことあるよ」
気になったり忘れたりしながら、それから二カ月後ようやく行った近くの医院の医師は
「検査では今のところ、これといった原因は不明だ。肝機能の薬で様子をみてみよう」
一カ月して薬が切れたので、再度医院を訪れた。各種検査の結果、あるタンパク質に気掛かりなところが見られると言われて、栄養のバランスが悪いのだろうぐらいに考えていた。眼の黄色みを聞いてみると、北郷市の総合病院で精密検査を受けてみなさい、紹介状を書きますからということであった。その病院は地域の医療センターである。一週間後に重い腰をあげて行ってきた。すると、三日間の検査入院を言い渡された。その場で予約を指定されたので、止む無く同意した。検査は長いカタカナ名の付いた大きな機械に何度も身を委ねた。機械のセンサーは相手が何であろうと無頓着である。ただ、プログラムに従って作動し、機能や役割を果たしている。冷静さだけが取り柄のように思えた。
芳子が小学生のとき、腹痛がひどくて近くの医院に診てもらったことがあった。医師は指三本を腹に当て、一方の手でいい音を出しながら指を叩いていた。医師は、耳を澄ましながら、指を少しずつずらしていった。あの時の、指三本から伝わる暖かみは、腹の中の痛みを取ってくれる魔力のように思えた。白衣を着た医師の姿に、例えようのない信頼感をもったものである。三日間の検査は、数枚のX線撮影を最後に全て終わった。翌日、担当医から結果の説明を受けた。検査が次第に込み入ってきたので、芳子にも感ずるところはあった。腫瘍であった。胆のうにできた病巣細胞が周辺の管壁に広がっているという。手術は困難だそうだ。今後の治療は化学療法と放射線になるという。これらの治療は沖見市でも可能であるというので、地元の市立病院での入院治療となった。
病は気からというが、病を知らされて気落ちした芳子の表情は、日に日に精彩を欠いていった。苛酷な治療は食欲を減退させ、倦怠ばかりを増長させた。内と外からの治療と称する病巣攻めは、それらを宿す体を日毎に蝕んでいった。入院十日目

に父吾郎が航海から帰って来た。船中でも、幸太から逐一連絡は受けていた。上陸するとそのままの姿で、病院に駆けつけた。四カ月前に見せた出航の時の芳子の笑顔は、そこには見られなかった。芳子の手をしっかり握り、言葉はなく目に涙が滲んでいた。

沖見に生まれ育った芳子には、同級生をはじめ友人、知人が多い。だが、わざわざの見舞い客にも最近は、応対するのがつらいものであると、サキヨに漏らしていたそうだ。体の動きが鈍くなったころからのサキヨの看病は、肉親にも及ばないものがあった。たまに出る漬物談義で、時間を忘れることもあったと後に聞いたことがある。それから三週間後の雨の降る日、家族、知人の涙とともに芳子は力が尽きてしまった。市立病院の医師は病状の進行の速さに驚いたという。タンパク質の異常とは腫瘍マーカーのことだったのに、栄養バランスのくずれと勘違いされてしまったと嘆いていた。見つけにくい病巣だったことを加えても、初期対応が遅れたことが悔やまれると述懐していた。

四

列車の乗客一行は三十分余りを過ぎて、まだ歩き続けている。口数少なく速足である。サキヨを背負っている事大の息もとうに荒くなっている。それを気付かれないようにと、歩調を合わせるのに懸命であった。足元だけを見ながら前進していると、前の方の歩みが止まったのに気が付いた。見ると、山裾に到着していた。これで安心してはいられない。運転手の五ツ井を先頭にして、今度は道なき斜面を登り始めた。灌木を分け入り、下草を踏み倒して登った。ひと足ずつの登りが安全の境地に到達できると思うと、自然に足の運びにも力がみなぎった。しかし幸太の体力はいよいよ限界に近づいていた。いっとき、太い木の幹に寄り掛かって息を整えた。目の前に伸びている蔓に掴まって、前進の助けにもした。とうとうサキヨの許しを得て、背中から下りてもらった。そして手を取って引き上げた。またサキヨも四つん這いになり、這い上っていた。息も絶え絶えの二人は、大きく遅れて皆に合流した。そこは斜面がなだらかで木も少なく、視界の開けた場所であった。道路からは五十メートルにも及ぶ高さと思われた。

「ここまで来れば大丈夫でしょう。全員到着できてひと安心です。ご苦労さんでした」

五ツ井は幸太への礼の次に、サキヨに向かっても礼を言い、頭を下げた。
「コーちゃん、どうもありがとう。恩に着ますですよ。本当にありがとう」
サキヨの謝意は同じ言葉を繰り返すほどに深いものがあった。
ひと息付いた事大は携帯電話を取り出した。ワンセグの画面では、津波の襲来を中継している。港の海面が盛り上がり、海が上げ底状態に見える。海水はより低い衝の方に向かって流れ込んでいる。岸壁の漁船は浮き上がり、波に押されて街の通りを漂流している。車が列をなして、木の葉のように流れて行った。建物さえも波に揉まれ、移動を始めている。画面を見ていた乗客から、悲痛な叫びと悲鳴が発せられた。
「これが津波か。こんなのいままで、見たことない」
「港が水に埋もれてしまったぞ。街が流されている」
「何だ、これは。あらあら、どうしよう」
港の日常では、想像もつかないような光景ばかりである。皆が見守る中、画面が突然消えた。これを見ていた石見が、脇からひとこと言った。
「画面の上の電源マークが点滅していたので、危ないなあと思って見ていたんですよ」
この事態を、外の誰もが気が付かなかった。それほどにショックの大きい映像であったのである。ケータイの電源切れにより、情報が入って来なくなった。一行にとって大きな不安である。情報はあればいいというものではない。余計な情報は時に、集団に混乱を招くことにもなりかねない。入る情報は的確に判断し、取捨選択の必要なこともある。誰が判断するのか。この場では運転手になるであろう。ケータイの暗い画面は、五ツ井の情報判断の機会を逸したことになる。
ところで、この一行の中でケータイが幸太の一台だけとは、いまどき不可解である。聞いてみると、自宅電話で十分だから、扱いが面倒だ、ゲームはしない、今日に限って忘れて来たなど様々である。当世の若者には必需的なものも、高齢者にはそれほどでもないようである。年金生活者にとって、ケータイ代は馬鹿にならないという意見もあった。ケータイのない時代を生き抜いて来て、社会的にリタイアした今になって、敢えてケータイの必要性はないというのが本音のようである。
ひとまず安全な場所にたどり着いた一行は、思い思いに休憩をとったり、地震の話で持ち切りであった。手持ち無沙汰をしていた男が、何気なく海の彼方を指差した。

「オーイ、向こうのあの白いもの、あれ何だ」
海と空との境目に一筋の白い帯が見えた。かすかな帯はほどなく近づいて来て、はっきりと確認することができた。途切れて聞こえた轟音は、連続的な地鳴りのようになり、唸りながら迫って来た。白波は一気に海岸線を駆け上がり、陸地を走りだした。脱出してきたばかりの電車の横っ腹に衝突した。電車は敢えなく横転し、レール脇に転げ落ちた。障書物に行く手を遮られた激浪は、新たな行く手を求めて高々と舞い上がった。白波は田畑の土を飲み込んで、黒い水塊となって牙を剥いた。丹精込めたビニールハウスが巨獣の足元にあるが如くに、容赦なく踏み潰された。
「何てこった。オーイ、治まってくれよ」
「アー、海が狂ってしもうたぞ」
「海には神さんが居るんだよ。裏切ったらいかんのだ。これはそのしっぺ返しなんだよ」
長年海に携わって来た着たちの叫びであった。漁業は海の恩人からの賜り物だと言う。恩人に失礼があってはならない。恩人の主は海の神である。神の機嫌を損ねないようにやって来たんだが。海に対する信仰なくして、漁業は成り立たないと叫んでいた。
電柱は全て水没し、一本も確認できない。背の高い樹木の何本かが、頂部だけを水面から突き出している。やっとの思いで呼吸しているように見える。助けを求めているようにも見えると言った人もいた。眼下の光景は、一面の水原になってしまった。
「この水では動けない。今夜は野宿だな」
この一言をきいて、運転手の五ツ井が叫んだ。
「みなさん、この状態では山を下りることはできません。今ある命を大切にする思いで、一晩頑張りましょう。明日になれば、新たな方策や展開が見えて来るはずです。だんだん暗くなって来ます。この場所からあまり移動しないようにお願いします」
五ツ井の言葉に、皆はこの後の覚悟を決めたようである。誰とはなしに連れ立って、一晩過ごすための用意が始まった。男達は周囲へ散って枯枝を集めだした。よく乾いており焚火の燃料に好都合である。女達は木の除から両手一杯に落葉を集めていた。クッションや寒さ凌ぎの役に立てればという。五ツ井と若手二人は、下草を踏み締めて円形の火床をつくった。落葉を周囲に積み、中央に枯枝を組んだ。十

人は楽に囲めるスペースである。
小枝で遊んでいた幼児が、母親を見つけて言った。
「お母さん、おなか空いたよお」
母はバッグから手際よく、ジュースとクッキーの入った箱を取り出して渡した。子連れの母親はどこへ行くにも、多少の飲食物は常備しているものである。このことがこの度は、大いに役立ったと母親は言っていた。幼児は箱のキャラククーがお気に入りらしく、自慢気に幸太の目の前に差し出して見せた。幸太が箱ごとかぶりつくまねをすると、素早く手を引っ込めて笑いこけていた。いつの間にか夕闇がせまっていた。頃合いを見計らって、愛煙家のライターで枯枝に点火した。周囲が暗くなり、何となく一抹の不安と心細さを感じていたところに灯った一点の明かりは、人の心を和ませるに充分な威力をもっていた。
「さあ、明日の朝までは長いですぞ。火を囲んで語り合い、時間を過ごしましょうよ」
五ッ井の激励に、不安な一夜を過ごす覚悟が、一人ひとりにできたようである。ここに居る人達は皆、沖見に住まいがある。この地震、津波で自宅を心配しないわけではないが、情報が入って来ないので、如何ともし難い。年寄りがこうして無事なのだから、若い者達はそれぞれに何とかして居るであろう、がこの場の雰囲気になっている。
皆の視点が焚火に集中しているなかで、八十を過ぎた最長老と思われる男が呟いた。
「わしが学校に上がる前、今日に劣らない地震と津波があったんだ。夜が明ける前であった。家がゆさゆさと長い時間揺れた。家族全員が跳び起きた。父親が大声で津波が来る、すぐ支度せい、逃げるぞと叫んだ。停電で真っ暗な中、家中大騒ぎよ。父親は提灯をかざして先頭に居た。両親と兄弟三人はしっかり手をつないで夜道を走った。着物の裾を跳ね上げて、走りに走った。裏の高台までな。途中、親から離れて泣いている子供を何人も見た。高台に着かなかった子供の何人かは津波にのまれたということだ」
記憶を辿るように、ポツンポツンと語っていた。さらに続けて
「年寄りや病人はリヤカーに引かれていた。自動車のない時代だからのう。戸板で運ばれている人もいたなあ。高台に着いたら、足の震えが止まらなかった。体が冷えて来たころ、暗い海の方からゴーという音だけが聞こえていた。間もなく、その

昔がすぐ近くに来た。いくらか明かりが差し始めてきたら、家も、学校も、木もみんな流されてしまっていた。わしは悲しくて泣きながら母親に掴まった。この世が終わりになるのかと思ったもんだ」

「今の貴重な話、何年ぐらい前ですか。昔、大津波があったとは、聞いておりましたが」

石見の問いかけに、男は目を輝かせて続けた。

「昭和八年の三月だ。その後にも津波や地震はあるが、今日のはそれに並ぶほどだな」

「昭和八年といいますと、確か宮沢賢治の亡くなった年と記憶しておりましたが」

「その通り。津波が三月で、賢治の死は九月だ。津波のことは賢治の日記にも書いてあると、研究者の書物で読んだことがある」

最長老のこの男、聞けば地元の名士だそうで、郷土の人物や出来事には造詣が深いそうだ。

賢治の講話が一段落したのを見計らったかのように、燃え盛っている焚火が急に崩れ落ちた。炎と火の粉が明るく舞い上がった。止むことのない余震であった。焚火を見つめている顔が一つ、またひとつと減っていった。夜が更けるにつれて睡魔に襲われていた。横になったり、落葉の中で寝入ってしまった人もいた。母の膝を枕にしている幼児は、全身落葉に埋もれて眠っている。まるで、羽毛に包まれたお姫様の風情である。火の当たる側は暖気が来るが、外側はまともな夜冷えである。寒さを悟ってか、五ッ井が切り出した。

「冷えて来ましたね。体を動かすわけにもいかないので、皆で歌でも歌いましょうよ」

焚火を見つめる目の半分位の同意を得て、始める曲目を求めた。五ッ井はカラオケの愛好家のようである。焚火の対面に居た男から、先ずは県民の愛唱歌からと促され、五ッ井も快く応諾した。大きな声のやり取りに横になっていた者も目を覚ましたようである。早速一節をリードし『しらかば、あおぞら、みなみー』に合わせて、後を追うようにほぼ全員が声をそろえた。歌の中には雪解け、山蕗、こぶしなどと郷土の自然が出て来て、そこに暮らす人々の人間愛が謳われている。昨日、眼下に見た荒れ狂う泥水に潰されていく田畑を思い、みんなが胸の詰まる思いになった。しばらくの間、歌と現実の風景のあまり

の落差に言葉がなかった。間合いをおいて五ッ井が
「わが郷土を一日も早く、歌のような自然あふれる大地に戻さなければなりませんな」
この一言に拍手を貴いながら、次の歌のリードに入った。歌自慢は声自慢でもある。その場に受けるような歌がいくらでも出てくる。歌声に乗せて手拍子や掛け声が入り、人の輪は歌の和となって夜陰に染み込み、雑木林にも鳴り響いた。演歌から学校唱歌へと変わり、締めくくりは地元と近辺の民謡になった。最後は『おこさ節』を手拍子に合わせて大合唱のもとに終了した。寒さも時間の経過も忘れさせるひとときであった。

五

眼下の向こう、漆黒のキャンバスにうっすらとした輝線が現れた。その周囲に薄明が広がり、新たな一日の始まりを知らせていた。平地は水溜まりが半分、引いた部分が半分である。地表は軟弱であり、高齢者の歩行には適さない。全員で半日待つことにした。昼を過ぎたころ水溜まりが縮小し、五ッ井の判断で下山となった。しかし、足元は滑って油断がならない。空腹による苛立ちがあり、緊張が続いているはずなのに、皆の声は明るいものであった。恐怖からの解放が全てを物語っていた。幸太は昨日同様、サキヨの手を引いて最後に下りた。やっとの思いで全員平地にたどり着いた。
しばらく歩くと、山間から延びている県道を横切った。割れて、砕けたアスファルトは泥水にまぶされ、朝の陽に輝いて見えた。はるか向こうに動く物体があった。やがて近づいて来、エンジン音を上下させて難儀している模様である。オフ・ロードで走るＲＶ車（多目的用途車）であった。水浸地帯を歩いている一行を見て停止し、運転手が降りてきた。
五ッ井が事情を説明した。北郷市の運送業者だという。県からの依頼で、飲食物を搬送中の帰途だという。一行の疲れた様子を見て人の命が優先とばかり、からの荷台に全員を押し込んで避難所へ折り返した。全員が沖見市の人間だと言ったが、沖見の避難所は満員で大混乱している。手前の里野の方が人は少なく落ち着いていると言われ、里野町へ行くことになった。車窓に見える奇妙な風景に、一行は言葉が無かった。それは、田園地帯に散乱している漁船であり、車であり、廃材の山で

あった。
車は町に到着し、曲がりの多い坂の突き当たりに小学校が見えた。運転手が受付で事情を説明し、その後手招きして皆を呼んだ。係員に促されるままに、受付簿に氏名、年齢、居住地などを記入した。机脇のダンボールから、パン一個と茶一本、更に畳まれた毛布一枚を渡された。全員が体育館に落ち着いたところで運転手の五ッ井が、避難協力への礼を言い深々と頭を下げた。五ツ井はこの後、ＪＲ里野駅へ行くということであった。町の様子を聞いて驚いた。全町停電に加えて水道、ガスも止まっているそうだ。どのケータイも不通。中継局が損壊しているらしい。これでは飲食以外は山泊まりと同じ条件である。一日ぶりのパンと茶で飢渇を凌いで間もなく、幸太も石見も同じようにまどろんだ。この大ニュースは電波を通して世界を飛び、船上の父達にも届いているだろう。返事は届かない。
一時間も経っただろうか。幸太は寝返りを打った。寒さに目が覚めた。体育館の床を通して這い上がる冷気を、敷いたブルーシートで遮ることはできない。毛布の半分を敷きにし、残りを掛けという中華饅頭風にして堪えた。山泊まりの見慣れた顔が周りに見える。窓ガラスには夕闇が映っていた。もうひと眠りと思っていたら、向こうから女性の声が耳をかすめた。時々発する抑えた咳の声に幸太は耳を澄ませた。
「夕べは寒かったもんな。時々うたた寝もしたし」
「薄いコートに焚火で、一晩だもんな」
「朝方、わしも体がざわざわしてな」
幸太は起き上がって、話の輪の中を見た。横たわっているのは梶沼サキヨである。
「おばさん、どうしたの。具合が悪いの」
「サキヨさんね。ここに着いた頃から熱っぽいってね。風邪だと思うんだけどね」
「ここじゃ、薬はない、医者は勿論おらんしな」
「頭を冷やす氷はおろか、水もないよって」
交代で口々にサキヨの症状を説明していたが、結局はどうすることもできない状態である。
「ゴホン、ゴホン」と咳き込み始めたその時、巡回だと言って町の保険師が体育館に入って来た。早速、咳を聞いてサキヨの側へやって来た。

「咳が出ているようですね。いつからですか」
矢継ぎ早に質問を浴びせた。細かくメモを執った後で、
「このような閉鎖された所で、大勢の人が寝起きを共にしておりますので、感染症が心配なのです。抵抗力も落ちてますので別室の方が安心です。受付で部屋を決めてもらって」
これまでの行き掛かり上、幸太が付き添う形でお供をした。別室とは体育館に隣接した小部屋で、『柔道室』の掲示があった。柔道用の畳が等間隔に整然と敷かれており、上に畳んだ毛布が一枚ずつ用意されてあった。
「ここなら、体育館より暖かくて、よさそうですね」
幸大の話し掛けにもサキヨは力なく返事をし、すぐに横になった。別室には数人の先客が居た。付き添いの寝るスペースはないので、幸太は後髪を引かれる思いで、体育館で夜を過ごした。
北郷市から朝食が届いたとの連絡があった。バナナ一本と水が一人分だそうだ。昨日のＲＶ車で運んだものと思われる。運転手の顔が浮かんで来た。名簿でチェックしているので、幸太はサキヨとの二人分を受け取った。サキヨは熱のせいか水ばかり要求する。それでは体が保たないからと、バナナの皮を剥いて差し出したが、口をつぐんで顔を背けた。顔色と息遣いから、サキヨの熱は更に上がっているように見えた。幸太は受付の段ボールに水が数本残っているのを思い出し
「別室に高熱で菅しんでいる人が居ます。頭を冷やすのに水一本戴きたいのですが」と受付の係に言ってみた。これは飲用なのだからと言わんばかりに渋々一本を渡してくれた。タオルがないので事大は、ポケットから取り出した水玉のハンカチに水を含ませて、額にそっと置いた。
「ああ、気持ちいい。コーちゃん、ありがとうよ」
閉じている瞼を無理に開けて礼を言い、わずかに口元に笑みを浮かべた。
避難所になっているこの小学校は、大地震の後、大半の生徒は下校したようである。しかしその後に襲来した大津波に度肝を抜かれた生徒達は、すっかり萎縮してしまい、結局学校で一晩過ごすことになったそうだ。翌日、親が迎えに来た生徒から帰って行ったという。二日を過ぎて迎えを待っている生徒が、この避難所に三人居た。一緒に行動しているこの子達に、石見が話し掛けた。隣町の教員だと言ったら、心を開いてくれた。受付の係員に、ここで何か協力をしたいと申し出たところ、

食事の配付をと逆に願い出てくれた。塞ぎ込んでばかりでは、精神的にもよくない。体を動かして気晴らしをと本人連も同意し

た。段ボールを男子二人が持ち、茶とおにぎり一個ずつを女の子が手渡しした。今夕のおにぎりは避難生活始まって以来の炊飯物である。僅かに残っている暖かみのあるものを、宝物でも拝受するかのように、両手を揃えて受け取ってくれた。子供達による配付ということもあり、暗い雰囲気の避難所に一筋の光明が差し込んだようになった。

翌日サキヨの隣に、娘に付き添われた母親が来た。血圧と心臓に難があるらしい。今まで体育館に居たが、寒さと病状を考えここに変えてもらったそうだ。幸太はサキヨとの関わりを大まかに説明した上で、付き添いで男手の及びにくいところを娘にお願いしてみた。そんなことならばと引き受けてくれて、本心ほっとした。夕方、暗くなる前にと、石見と子供達は夕食を配り始めた。輸送上の手違いがあったらしく、水の代わりにミカン一個とおにぎりであった。サキヨの高熱は一向に治まらない。咳に痰が絡み出し、時々苦しい息遣いをする。咳がひどくなったら、体の向きを変えるか、背中をさするかぐらいしか方法はない。今夕は水の配付がなかった。飲み残しの僅かな水をハンカチに移してサキヨの額に置いた。力なく何ごとかを言っているようである。毛布から出た手が何かを探すように、ゆっくりと舞っている。幸太がその手をとると、わずかに握り返してきた。目は閉じたままだが、目鼻立ちの整った横顔は、そのまま娘の真由に継がれている様に見えた。ひと昔以上も前のあの辛い場面が、幸太の脳裏に蘇った。

六

高校生の幸太は、放課後の講習授業に出ていたので、入院中の母の見舞いは久しぶりであった。幸太の顔見せが、芳子にとっては最高の慰めである。会った当初は力なく話しているが、時間が経つにつれ元気が出て来て、笑顔に冗談も加わる様になる。日中、母の同級生の啓ちゃんが来てくれたそうだ。帰り際、ケータイを忘れて帰ったので届けるよう頼まれた。

普段通らない道ではあったが、車道の端を自転車で飛ばした。夕暮れが迫っていて、行き交う車はライトを点け始めていた。緩やかな登り坂である。向こうに、歩道を下って来る二人連れが目に入った。白シャツと白セーラー服が手を繋いでいる。

自転車は間もなく二人連れと擦れ違った。幸太は思わず「あっ」と声を出しそうになった。自転車のバックミラーに、セーラー服の振り返る姿が映っていた。「あれは真由だ」と心の中で叫んだ。ハンドルを握っている掌に汗が滲んでいた。ようやく坂の頂を通過した。道端に市の広報板が見えた。『金属羅神社　秋の例大祭』を知らせるポスターが貼ってあった。中学、高校と別々になり、真由との出会いは一瞬ながら五年ぶりのことであった。あれから指折り数えて、十五年の歳月が過ぎ去った。今こうして熱にうなされているサキヨの横顔を見ていると、時の移り変わりに伴う人間模様の変遷に、感慨無量のものを感じていた。

大津波から五日経った日の朝である。前浜の岩陰の奥から三人の遺体が発見されたという連絡が消防を通じてあった。心当たりのある人は前浜までということである。避難所は色めき立った。小学生三人も該当するかもしれない、行って見たいということになった。もし生徒の身内でも居れば、その後の対応が忙しくなると思い、石見は幸太にも応援を求めた。昨夜から、経過に変わりのないサキヨを隣の娘に頼んで、生徒と一緒に出かけた。

町なかの漂流物は、依然としてそのままである。道路上の瓦礫などが脇に寄せられた程度であった。浜は大勢の人波である。消防や警察などの誘導で、十人ずつがテントに入っての確認である。テントにたどり着くまでに一時間以上も待った。列の流れに押されながら、恐る恐るの確認であった。三人の該当者は居なかった。厳しい現実に遭遇しなかった安堵感と、決着が先延ばしになっただけの不安感とが複雑に入り交じり、小さな胸を痛めているようだった。昼近くになり昼食配付の仕事があるからと、子供達は急いで避難所へ向かった。子供達の後ろ姿を追うように見ながら幸太は、このまま何日も避難所に居続ける子供達の行く末は、と考えると胸の詰まる思いになった。

朝早く出て、帰って来るまでに半日を要した。幸太が柔道室の戸を開け、中へ入ろうとして足が止まった。サキヨの周りに女性が数人対座している。顔に水玉のハンカチが見えた。事大の姿を見つけて娘が寄って来た。

「静かに休んで居ましたのが、急に咳込んで来まして、息苦しそうだったので母と一緒に向きを変えたり、背中をさすったりしたんですが、ますますひどくなって、ついに――」

途切れ途切れの涙声の説明に、幸太も聞くに堪えず

「もうよろしいです。こんなに急変するとは、思ってもいませんでした。大変ご面倒をおかけしまして、申し訳ありませんでした」
娘とその母親に向かって幸太は何度も頭を下げた。握ったサキヨの手は筋張っていたが、どこかにまだ温もりが残っているような気がした。
横たわっているサキヨを前にして、放心状態の幸太はゆっくりと考えながら自問した。
「この五日間、オレは何をしていたのか。専ら梶招のおばさんに付き添っていた。それは電車での偶然の出会いから始まった。あの時、普段なら『お元気で』で別れていたはず。ところがこの度は、大ハプニングに遭遇してしまった。みんなまとまって居よう、の指示で足を痛めたおばさんを背負って山へ逃げた。避難所で発熱し、だんだん離れるに忍びなくなってしまった。濡れハンカチを額に当てるだけの対処であったのに」
この時、幸太の頭上から何らかの声を聞いたような気がした。それはほんの一言『幸太、お母さんの代わりのお努め。ありがとう』
幸太は思い直して受付へ行き、改めてサキヨの事実を報告した。係員は、娘さんから異状を知らせに来てくれたが、何の手当もできず申し訳けなかったと陳謝した。一時間ほどして、間もなく安置室へ移すとの連絡を受けた。幸太は通院仲間に知らせた。思いがけない別れに涙が止まらなかった。子供達も来てくれて手をあわせてくれた。遺体安置室は、校舎の最も外れの一室があてがわれてあった。溺死者がほとんどだそうだ。その夜遅くに県派遣の医師が来て、法に基づく遺体の確認と検案書の作成を行った。室内は重く、沈んだ特有の臭気が充満していた。医師が帰り際に、枯れ草を室内で燻して線香の代わりにするとよいと指示をしていた。
翌日の昼頃、受付から一通の封入りの書面が幸太に渡された。長々とした文面の要点は
一、町の火葬場は地震による崩壊で作動不可
二、近隣の自治体も停電、燃料なしで作動不可
三、日を経るにつれ、遺体の変質あり
四、町長の責任で一旦仮埋葬、いずれ火葬する
というものであった。受付で詳細を聞くと
「やっと一部で車が動くようになりました。仮埋葬は不本意ではありますが、今は

これしか方法かないのです。何とかご理解をお願いいたします」
震災から一週間目の早朝、小学校の裏手にトラックが一台、人目をはばかるように止まった。後を追って来たジープから、マスク姿の係員が担架を持って校舎に入った。名簿と遺体のカード内容を慎重にチェックしながら、担架は十八往復した。搬入が終わると全員一列になり、荷台に向かって丁寧に一礼した。これを遠目に見ていた幸太らの近親者は、促されてジープに乗った。二台の車は静かに学校を後にした。
避難所玄関の受付に、女性が一人、いかにも疲れた様子で立っていた。
「ここに居らっしゃる方々の、名簿を見せていただけませんでしょうか」
一人残っていた受付の若い係員が対応した。
「ボクは仕事の応援ということで、今朝ここに来たばかりなんですが」
ここの事情はよく分からないと言わんばかりである。段ボールから名簿らしきものを二冊取り出して、内容をパラパラと確認した。
「これですね。性別毎にお名前、年齢、居住地の順になっております」
そのうち『女子』の名簿を開いて、女性は忙しく指を横に走らせた。三枚目の中程で
「あっ、あった。お母さんの名前だ」
止まった指の下には『梶沼サキヨ　73　沖見市』とあった。沖見市民がここ里野町の避難所に居る理由を尋ねると
「さあ、ボクには分かりません。もうすぐ係の者が戻って来ますので聞いてみます」
女性の指は更に下の段へ移動して、備考欄へ来た。
「この一番下の『B――003』は何のことなのですか」
「さあ、ボクには分かりません」
若い係員が同じ答で恐縮している時、軍手を付けたままの中年係員が外から戻って来た。記号の意味を尋ねると、女性に向かって声を潜めて
「実は一昨日、亡くなられた方なのです」
言葉少ない説明に、女性は膝の力が抜けそうになるのを、机にもたれて必死にこらえて
「母は何で死んだのですか。今、どこに居るのですか」
「実は安置しておりました多くの遺体が、変質し始めたものですから、仮埋葬として町の裏山へ、今朝搬送したばかりなのです。この方には、息子さんが付き添って

行かれております」
「えっ、息子さんですか。子供は私一人なんですが。その人は誰ですか」
「いや、てっきり息子さんだと思って見ておりました。確認しておりませんので、お名前は分かりません」
「仮埋葬って、どこですか」
一言聞いただけで、礼もそこそこに女性は玄関を飛び出した。客を降ろしたばかりのタクシーに乗って、裏山行きを指示した。
玄関脇の壁に、見開きした新聞紙が張ってあった。中央に『復興』の二文字が大書してあった。

了